様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　５日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2010　～　2012
課題番号：22320023
研究課題名（和文）
大陸自由主義の存在と諸形態―「公共圏」による新しい思想地図とコンテクストの模索
研究課題名（英文）
The existence and forms of the liberalism on the European Continent: An exploration of the new map and context of the history of social thought using the concept of public sphere
研究代表者
安藤　隆穂（ANDO TAKAHO）
名古屋大学・経済学研究科・教授
研究者番号：00126830

研究成果の概要（和文）：イギリスの経済的自由主義の影響によってフランス革命の時代にフランス自由主義が成立し、それは、ナポレオン帝政の時期に、ヨーロッパ大陸に広がり、各地域に自由主義の成立を促した。その過程は、ナポレオン帝政へ対抗する公共圏の拡大と発展に重なる。本研究は、J.スタールと B.コンスタンらのコペ・グループの活動を中心に、ヨーロッパ諸地域における自由主義の成立の諸相を発見し、これに果たした公共圏の役割を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Under the influence of the English economic liberalism, the French liberalism established during the era of the French Revolution. It then spread to the European continent during Napoleon’s imperial regime, and stimulated the formation of liberalism in various regions. This process coincided with the expansion of public sphere, which opposed Napoleon’s imperial regime. This research focuses on the activities of the Coppet Group, whose members include J. Staël, B. Constant and others. It discovers the various aspects of the formation of liberalism in different regions around Europe, and clarifies the role played by public sphere in the process.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	5,300,000	1,590,000	6,890,000
2011 年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
2012 年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
総　計	14,400,000	4,320,000	18,720,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・思想史
キーワード：社会思想史、自由主義、公共性、公共圏、市民革命、共和主義、ナポレオン帝政、産業主義

１．研究開始当初の背景

トクヴィルを中心としたフランス自由主義研究が活性化してきていたが、フランス自由主義成立期の研究はいまだ遅れており、また、フランス自由主義の影響を受けたと思われる大陸諸地域での自由主義の動向については、研究は皆無に近かった。研究代表者は、『フランス自由主義の成立』(2007 年)によっ

て、コンドルセからコンスタンへの系譜を中心に、フランス自由主義成立期の思想史の新文脈を提案しており、これをさらに発展させるとともに、大陸における自由主義成立の諸相を探求しようと考え、本研究を構想した。自由主義研究にとって重要なのは、自由と公共の関係をめぐる問題圏であって、該当時期の公共性および公共圏の動向分析を方法的意識として持つことによって、公共性の思想史の文脈発掘をも同時課題に据えることになった。「大陸」という国別を超える空間設定と「公共圏」という社会と国家の中間領域を思想展開の中核的磁場に置くことは、社会思想史研究にとって、方法的問題提起となりうるとの期待も保持していた。

２．研究の目的

19 世紀前半ヨーロッパの思想地図に大陸における自由主義の交流・発展・諸形態を書きこむことを目的とした。大陸自由主義については存在証明さえ定かでない状況であったが、内外で活性化したフランス自由主義研究を参照軸に、研究代表者によるフランス自由主義成立期の研究成果を組み込んで、フランス自由主義自体が大陸自由主義の一形態であるという見通しのもとに、視野をドイツ、スイス、イタリアなどの諸地域に拡大し、大陸自由主義の存在とその諸形態を検索しようとした。各国別の思想史では捉えきれない時間と空間に踏み込むため、思想における公共圏の位置に注目した。とりわけ、フランス革命とナポレオン帝政の時代については、自由と権力をめぐる問題が展開した思想的磁場として、公共圏の成立と発展を視野に入れることが重要なのである。したがって、本研究は、公共圏の歴史的動向を強く意識し、学際性を駆使し、自由主義と 18 世紀啓蒙との連続性、ロマン主義や初期社会主義との関係をも示す思想史の新文脈発掘に挑戦した。また、本研究課題の開拓的性格に鑑み、海外に問題提起的発信を行うことを課題とした。

３．研究の方法

本研究の課題に近い専門領域の研究者合計６名（社会思想史および経済思想史研究者からの４名に歴史研究者２名を加えた）によるチームを編成し、各人が、それぞれ固有の専門的課題の追求を通して、フランス自由主義と大陸自由主義の思想史的文脈を模索し、その作業を連携させていくという方法を基本とした。未開拓の研究課題であり、思想史研究の古典的手法の原点に帰り、文献と資料の収集と批判と編集を基本に、研究会等による研究交流によって、解読と思想の文脈発掘を進めた。また、フランス自由主義を展望台として大陸自由主義を発見するという研究の枠組み上、フランス以外の地域の研究が手薄とならざるを得ないので、これを外部研究者とのネット・ワーク構築によって補うこととした。この場合、分野としては、学際性を重視し、また、国内のみならず、海外との連携に努力した。当初、フランス圏との連携が中心であったが、本研究課題が、東アジア圏の研究者に強い関心を呼んだこともあり、後半は、中国と台湾の研究者との交流が密となった。（代表者が体調の事情で欧米圏への渡航を自粛したことにもよる。）

４．研究成果

大陸自由主義の存在と諸形態について、研究開始当初の予想にみあう形で、検索しえたと考える。大陸での自由主義は、イギリス自由主義特にアダム・スミスの思想の影響によって、まず革命直前のフランスで胎動がはじまる。そうして、大陸諸地域での自由主義の成立の機運は、フランス革命とナポレオン帝政の時代に、このフランス自由主義の発展に刺激され、醸成されたのである。したがって、大陸での自由主義は、フランスの場合を含め、あるいはフランスの場合に規定され、共和主義の展開過程でこれに隠れて成立し、共和主義の困難化で自立するという特徴をもつ。本研究は、当初の予想以上に、共和主義という衣服をまとった自由主義の存在形態の発掘に力を尽くした。この点で、本研究が用いた公共圏への着目という方法は、有意義であった。共和主義における自由の公共圏設計構想の中に自由主義の胎動を発見することができ、自由主義思想史の視野を大きく広げ得たと考える。具体的には、フランス自由主義について、自由主義という形式にとらわれず、啓蒙期以来の自由主義的経済認識の流れについて（大田一廣）、アカデミー等イデオロギーの諸装置における共和主義と自由主義の相克について（高木勇夫）、教育史における共和主義と自由について（前田更子）、コンドルセからコンスタンへと至る共和主義と自由主義について（安藤隆穂）の諸論点を中心に、これまで知られていなかった共和主義からの自由主義の成立という思想史的文脈を見出し得たと考える。とりわけ、J. スタールと B. コンスタンを中心としたいわゆるコペ・グループという思想家集団は、共和主義運動によってナポレオン帝政に抵抗する中で、共和主義から自由主義への脱皮を図るとともに、大陸諸地域に自由主義の成立を刺激したのである。逆に、大陸諸地域の思想は、ナポレオン帝政への抵抗運動において、啓蒙思想以来の大転換と屈折を経験するのであるが、コペ・グループのネット・ワークの大きな影響下にあったのである。したがって、フランス以外の大陸諸地域における自由主義の検索については、啓蒙思想から 19 世紀思想への展開を視野に、共和主義の受容と反発さらに

屈折過程を重視し、複雑な諸相において自由主義的契機を発掘しなければならなかった。ドイツ圏について、啓蒙期の自由の道徳哲学の展開(大塚雄太)、ロマン主義への屈折(原田哲史)を視野において、自由主義の文脈発掘に見通しをつけたが、それ以外の地域については、外部研究者との交流による知識の吸収段階にとどまった。

研究成果については、すでに、各人が学会報告、論文投稿などして公表してきたし、研究課題に関連して学会からの書評依頼を受けるなど影響力を行使する機会も得たりしているが、総括的成果としては、まず、2013年度公刊予定の岡本明・安藤隆穂編『ナポレオン帝政と公共圏』に反映させ(安藤隆穂、高木勇夫、大塚雄太が論文寄稿)、続いて、著書『大陸自由主義の存在と諸形態』を編集し、出版にむけて準備をする。

各年数回にわたる定期的メンバー間研究会の他、やはり各年適宜数回にわたって外部研究者を招く研究会やワーク・ショップおよびシンポジウムを企画し、研究の交流と発信に努めてきた。ヨーロッパ圏については、フランス政治科学院の L.ジョーム教授を招き名古屋大学で講演会を行ったほか、パリ第 8 大学の N.ヴァセック教授、さらにはドイツの諸大学の研究者と交流をもち、ハレ大学のＪ.シュトルツェンベルク教授を受け入れ教授としてメンバーの一人の大塚雄太のハレ大学への留学が決まった。また、公共圏と自由主義をつなげる方法意識が注目され、東アジア圏の人文学研究者との交流が深まった。これを反映させ、名古屋大学で、台湾高等研究院その他から研究者を招き、名古屋大学高等研究院レクチャー「近代を問う東アジア」(2013.01.28)を開催し、また、名古屋大学高等研究院書評会「東アジア思想交流史」(2013.03.26)を実施した。

これらの実績をもとに、内外にわたって、研究ネット・ワークを発展させ、研究の発展に貢献していきたい。喫緊では、2013 年 9 月にカナダのヴァンクーバーで開催される高等研究院世界連盟（UBIAS）による国際シンポジウム「知識」において、セッション「知識の国際的伝播と文脈の変容」を主催し、本研究の成果を反映し、自由主義研究について問題提起する。また、南京大学高等研究院、台湾高等研究院などの研究者との間で、自由主義を中心とする近代思想研究の合同プロジェクト樹立を構想している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１２件）

① 原田哲史、Die modifizierende Aufnahme der ″Anschaulichen Theorie″ bei Z. Takashima und ihre Nachwirkungen: Ein Stammbaum der ideengeschichtlichen Wirtschaftsforschungen in Japan、H. Kurz (Hrsg.): Studien zur Entwicklung der ökonomischen Theorie XXVII (=Schriften des Vereins für Socialpolitik, Bd.115/XXVII)、査読無、2012 年、91-103 ページ
② 大田一廣、『百科全書』におけるエコノミーの概念、『龍谷大学経済学論集』、査読無、第 51 巻 4 号、2012 年、15-26 ページ
③ 前田更子、19 世紀前半フランスにおける初等学校と博愛主義者たち―パリ、リヨンの基礎教育協会をめぐって―、『明治大学人文科学研究所紀要』、査読有、第 70 巻、2012 年、126-150 ページ
④ 大田一廣、戦後日本のマクロ経済的特質、『國際經貿探索』(広東外語外貿大学)、査読無、第 27 巻第 9 期、2011 年、4-10 ページ
⑤ 原田哲史、Die Verortung der öffentlichen ″Meinung″ in der Wertbestimmung in der älteren deutschen Gebrauchswertschule: J.F.E. Lotz und sein Begriff ″gemeine Meinung″、H. Hagemann (Hrsg.): Studien zur Entwicklung der ökonomischen Theorie XXVI (=Schriften des Vereins für Socialpolitik, Bd. 115/XXVI)、査読無、2011 年、61-82 ページ
⑥ 大塚雄太、(書評) 井川義次著『宋学の西遷－近代啓蒙への道』、『社会思想史研究』、査読無、第 35 巻、2011 年、164-168 ページ
⑦ 髙木勇夫、ヨーロッパの民衆文化とスポーツ、『スポーツ研究』、査読無、第 24 号、2011 年、55-73 ページ
⑧ 安藤隆穂、(書評) 堤林剣著『コンスタンの思想世界－アンビヴァレンスのなかの自由・政治・完成可能性』、『社会思想史研究』、査読無、第 34 巻、2010 年、266-269 ページ
⑨ 大塚雄太、クリスティアン・ガルヴェにおけるドイツ近代像の成立、『日本 18 世紀学会年報』、査読有、第 25 号、2010 年、62-75 ページ

〔学会発表〕（計１６件）

① 安藤隆穂、東アジア思想交流史の方法をめぐって、名古屋大学高等研究院書評会、2013.03.26、名古屋大学
② 安藤隆穂、近代を問う東アジア-思想史から見る近代、名古屋大学高等研究院レクチャー、2013.01.28、名古屋大学
③ 大田一廣、『百科全書』におけるエコノミ

ーの概念をめぐって、『百科全書』研究会、2012.12.15、慶應義塾大学
④ 前田更子、19 世紀半ばのフランスにおける女性教員の養成について、日仏教育学会、2012.11.24、早稲田大学
⑤ 大塚雄太、「通俗哲学」としての道徳哲学―ガルヴェにおける理論と実践―、経済学史研究会第 212 回例会、2011.12.17、関西学院大学
⑥ 大塚雄太、ガルヴェとファーガスン―18 世紀ドイツにおける道徳哲学の解釈と深化の一形態、社会思想史学会第 36 回全国大会、2011.10.29、名古屋大学
⑦ 安藤隆穂、The Rise of French Liberalism、大学高等研究院国際会議、2011.06.25、中国・復旦大学
⑧ 安藤隆穂、スミスを読む近代フランス、名古屋大学高等研究院レクチャー、2010.06.24、名古屋大学

〔図書〕（計１０件）
① 安藤隆穂、岡本明、高木勇夫ほか、ミネルヴァ書房、『ナポレオン帝政と公共圏』、2013 年出版確定
② 橋本伸也、岩下誠、広田照幸、前田更子ほか、昭和堂、『近現代世界における国家・社会・教育』、2013 年出版確定
③ 髙木勇夫、オフィス高城、『世界史の中の映画～映画と歴史のただならぬ関係（後篇）、2012 年、A4 版・68 ページ
④ 安藤隆穂、佐々木武、田中秀夫ほか、京都大学出版会、『啓蒙と社会―文明観の変容』、2011 年、309-336
⑤ 服部正治・竹本洋、原田哲史ほか、日本経済論評社『回想　小林昇』、2011 年、106-124
⑥ 安藤隆穂、三浦信孝、水田洋ほか、勁草書房、『自由論の討議空間―フランス・リベラリズムの系譜』、2010 年、129-168

６．研究組織
(1)研究代表者
安藤　隆穂（ANDO TAKAHO）
名古屋大学・経済学研究科・教授
研究者番号：00126830

(2)研究分担者
大田　一廣（OTA KAZUHIRO）
阪南大学・経済学部・教授
研究者番号：70185263

髙木　勇夫（TAKAGI ISAO）
名古屋工業大学・工学研究科・教授
研究者番号：20179419

原田　哲史（HARADA TETSUSHI）
関西学院大学・経済学部・教授
研究者番号：70208677

前田　更子（MAEDA NOBUKO）
明治大学・政治経済学部・講師
研究者番号：30453963

大塚　雄太（OTSUKA YUTA）
名古屋大学・高等研究院・特任助教
研究者番号：70547439

(3)連携研究者　なし